

# 徂徠学派の訓読論と漢文翻訳

嚴 錫 仁

## 一、はじめに

日本では儒教の経書などの漢文書籍を翻訳する際に、「訓読文」という独特な形式の文章を用いる。出版社の出版意図や費用など色々の事情があるので、一律的にいうことはできないが、多くの漢文翻訳書の体裁は、原文と現代語翻訳の中間に訓読文を位置させ、さらに翻訳者の注解や解説などを加える形式をとっている。

その訓読文とは、辞典的な定義で「漢文を日本語の文法にしたがってよむこと」をいい、ほかに「書き下し文」「読み下し文」ともいう。<sup>(1)</sup> 日本のように漢字を外国語として使用してきた韓国の朝鮮時代の諺解文に該当するものであるが、韓国ではすでに姿を消した漢文解釈の方法が、日本では今日まで生き続け、漢文と現代語訳の中間に位置して、まるでその二つを結びつける橋であるかの役割を果たしているのである。

こうした日本の漢文訓読について、比較文学者の川本皓嗣は、「いわゆる漢文、あるいはその日本における具体的な存在様式である漢文訓読は、考えれば考えるほどふしぎなものである。その曖昧さ、正体のつかみ難さと

いう点と、それとは裏腹の存在の重さ、巨大さ、根深さという点で、それはまさに日本文化の特性を典型的に表しているようだ<sup>(2)</sup>”といい、訓読そのものを重層的で複雑な日本文化の一つの特性として捉える。さらに、川本は、漢文訓読が日本文化の一部分を形成する具体的な一例として、翻訳論上の寄与を取り上げているが、これが本稿で注目したい部分である。

漢文訓読は、たんに、手早く容易に外国語を読み解くために工夫された便利な方法というだけではない。

それは、訳文のなかに可能な限り原文の姿・形を残そうとする翻訳の特異な一形態として、つまり訳文の自然さや分かりやすさを犠牲にしてまで原文尊崇の態度を貫こうとする翻訳の極限的な一形態として、翻訳論上に興味深い問題を提供している<sup>(3)</sup>。

このように直訳に近い漢文訓読が日本で数百年にわたって行われてきた理由について、川本は、こうした「問い自体がほとんど問われていない」といいながら、自身では「日本では漢文がたんなる外国語テキストという域を超えて、神聖視、聖典視されていたからである<sup>(4)</sup>」というように答えている。漢文学者ではなく、いわば部外者の英文学専門家の比較文学的な視角からの指摘になるので、妙に納得させられることもあるが、この漢文訓読と翻訳論の関係については、日本の代表的な翻訳語研究者の柳父章は、次のように述べている。

この「漢文訓読」という読み方は、近代以後の「翻訳」にとっても特に重要である。それは、やがて近世から近代にかけて、日本人が西洋語と出会うことになったとき、この「漢文訓読」方法が、形を変えて「英

文訓読」、「仏文訓読」などとして受け継がれることになったからである、と私は考えている。……要するに、日本人は、伝統的大和言葉系の日本語とは別に、翻訳用のもう一つの日本語の書き言葉、すなわち「漢文訓読体」をつくってきたのである。これこそが、世界中でも稀な、日本人が育ててきた独特の翻訳方法であった。<sup>(5)</sup>

柳父は、漢文訓読体が現代日本語のなかで翻訳用の文章語Ⅱ記述言語の原型となり、「世界中でも稀な独特の翻訳方法」であることを説いている。柳父のこの主張はすくなくとも、同じ漢字文化圏の韓国と比較して、今はなくなってしまう朝鮮時代の「諺解」のような古文法による文章Ⅱ訓読を、二一世紀の今日に至っても翻訳文の必須要素として持続しているという事実からして、漢文テキストに対する日本の「独特の翻訳方法」として認めてよいであろう。

以上、川本と柳父の、漢文訓読への現代研究者の主張を紹介したが、実は訓読が翻訳であるという自覚や指摘は、江戸時代の荻生徂徠（一六六六～一七二八）によって始まったことである。しかし、それは逆説的に、徂徠がそれまでの伝統的な漢文訓読を否定することによって得られた結果であった。徂徠は、中国宋代の新儒学を批判し、先王の道は中国古代の言語を基準としなければならないという古文辞学の方法論を主張したが、彼の訓読否定はそれと連動するものであった。この徂徠の訓読否定論は彼の弟子の太宰春台（一六八〇～一七四七）が継承した。

本稿では、訓読文が今日までも漢文翻訳において主人公の地位を失っていないことを念頭に置いて、徂徠と春台の訓論を吟味しながら、彼ら以後の漢文翻訳論の一端の状況を辿ってみることで、日本の漢文翻訳がいかなる

歴史的・思想的な脈絡を背景にして展開してきたのかを考えてみたい。

## 二、徂徠と春台の訓読論

前で徂徠の古文辞学に触れたが、次のような立場によるものである。

宇は猶ほ宙のごときなり。宙は猶ほ宇のごときなり。故に今言を以て古言を眎、古言を以て今言を眎れば、均しく之れ朱離鳩舌なるかな。科斗と貝多何ぞ扱ばん。世は言を載せて以て遷り、言は道を載せて以て遷る。道の明らかならざるは、職として是に之れ由る。<sup>(6)</sup>

同じ言葉（漢字）といつても、時代ごとにそれが表している意味は違ってくるので、聖人の道を正しく理解するためには、徂徠当時の学問研究の標準であった朱子学的な「今言」ではなく、中国古代の「古言」に基づいて解釈しなければならぬ、という主張である。二程と朱熹も古文辞には理解が足りなかった、と宋代の大学者さえも低評価する徂徠は、この古文辞学の方法論を中年に至って「天の寵靈」<sup>(7)</sup>によって得たというが、ここには当然ながら日本人としての、日本語と異なる中国語（徂徠の言葉で中華語、崎陽の学など）<sup>(9)</sup>に対する自覚も含まれている。あるいは、中年以前から外国語として対面していた中国語への理解が、<sup>(10)</sup>古文辞学の方法論を先導したかも知れない。

それはともかく、この立場は、徂徠において日本式の漢文訓読（和訓）に対する再認識と否定として表出され